

日本におけるトルコ関係文献の推移（2） ムスタファ・ケマル・アタテュルク関連文献の研究

著者	三沢 伸生
著者別名	MISAWA Nobuo
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
巻	54
ページ	159(138) - 183(114)
発行年	2020-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00011865/

日本におけるトルコ関係文献の推移(2)

——ムスタファ・ケマル・アタテュルク関連文献の研究——

三 沢 伸 生

はじめに

死後80年を経ながらも、ムスタファ・ケマル・アタテュルク(1881-1938)は、日本を含め世界各国において最も有名なトルコ人として認識されている⁽¹⁾。また現在もなお、トルコ共和国において国家が発行する紙幣や切手にはその肖像が描かれ、大小問わず国内のあらゆる街角にその銅像が建立され続けている。2010年から連鎖的に拡散した「アラブの春」という市民運動において、アラブ諸国で数多くの独裁的指導者たちが失権したことと好対照である。

しかし日本では1923年10月29日のトルコ共和国建国前後に関して、学術書・学術論文はもちろん、通俗的・時事的文献や雑誌記事を問わず、アタテュルクおよび新生トルコ共和国に関連する記述はほとんど見出すことができない。その原因は明白である。すなわち両国間の政治的・社会的背景があるわけではなく、全く日本側の事情による。トルコ共和国建国の約2か月前にあたる1923年9月1日に発生した関東大震災により未曾有の壊滅的な被害を受けた日本社会には、新生トルコ共和国の状況、ムスタファ・ケマル・アタテュルクの動静を把握する余裕が全くなかったのである。

それでも震災復興が進む一方で、新聞記事が断片的に短報を掲載することはあっても、アタテュルクが没するまでに、付表のように徐々にではあるが公刊された一般図書文献や雑誌記事にアタテュルクおよびその指導下のトルコ共和国に関するものが現れだした。その一方で、国交樹立にともない外交官をはじめとする官僚・

役人たち、および在外公館開設により駐在武官を派遣した陸・海両軍は、精力的に公刊を目的としない、ないしは部内での回覧を目的とした形での文献による情報集約・部内共有をはかっていた⁽²⁾。

2. 文献の史料性格

本稿では、管見の限り、日本において刊行されたアタテュルク関係の文献について、便宜上、以下のように時期区分を設定しながら整理・分析していく。すなわち、A.同時代の文献(～1938年)、B.第二次世界大戦期の文献(1939～1945年)、C.戦後の文献(1946年～)の3つの時期区分である。第一次世界大戦に際しアタテュルクの軍人としての名声を高めた1915年のガリボリの戦いに関する文献がいくつかみられるものの、日本におけるアタテュルク関係の文献は、まずもって前述のように1923年のトルコ共和国設立をうけ、1924年に締結、1925年に発効に至ったローザンヌ条約により日本と新生トルコ共和国との間に外交関係が樹立され、外交官・軍人・財界関係者が数多くトルコに来訪するようになってから顕著になる。そこで本稿ではこうしたアタテュルクと同時代の駐土、訪土日本人による様々な文献も含んでいる。これに先立つ祖国解放戦争当時において、アタテュルクが指導するアンカラ政府を訪問した日本人は確認されていない⁽³⁾。

3. 各時期文献の特徴

A. 同時代期

アタテュルク本人との直接面会を果たした日

本人は、イスタンブルに拠点を構えていた日本大使館館員・駐在武官がほとんどである。ローザンヌ条約を受けて、日本とトルコ共和国の間に正式な外交関係が樹立されたものの、アタテュルクの死去に至るまで両国間に大物政治家が往来することなく、外交関係の主体はイスタンブルに開設された日本公使館（のち大使館に昇格）、東京に開設されたトルコ大使館であった。

日本は、小幡西吉（1873-1947）やのちに首相となる芦田均（1887-1959）をはじめ公使・大使以下、有能な外交官たちを駐トルコ公使館・大使館に派遣していた（表1参照）。公使・大使は外交儀礼として事前のアレグマンに基づき、アンカラに信任状を提出に赴くのが通例であったので、直接に大統領たるアタテュルクに

謁見したものと考えられる。小幡は日本が満を持してトルコに送り込んだ初代特命全権大使であったが、彼の主眼は両国間の貿易振興にあったため、付表のようにイスタンブルから発した叙述の多くは純粋に貿易情報がほとんどであり、アタテュルクの経済政策に言及することはあっても、間近に接する機会があったアタテュルク本人についてはほとんど言及がない⁽⁴⁾。

陸軍・海軍の駐在武官（表2参照）のなかで、とりわけ1927年9月から1930年6月まで陸軍駐在武官としてイスタンブルに赴任した橋本欣五郎（1890-1957）については、アタテュルクの思想に感化を受けて帰国後に桜会を結成したと巷間言われている。しかし、日本・トルコ双方の公文書において橋本がアタテュルクに謁見し

表1 駐トルコ特命全権公使&特命全権大使（戦前・戦中期）

発令	入国	着任	帰国	氏名
	1921/04/18	1921/04/18?		内田定槌（特命全権公使）
1923/01/31		1923/01/31	1923/07/15	内田定槌（特命全権大使）
		1923/07/15		笠間杲雄（代理）一等書記官 ※代理は高級委員代理？
		1925/01/29		花岡止郎（代理）参事官 ※代理は高級委員代理？
		1925/03/23		花岡止郎（臨時代理大使）
1925/06/12		1925/11/17	1928/10/11	小幡西吉（特命全権大使）
		1928/10/11		芦田均（臨時代理大使）
		1929/11/24		二瓶兵二（臨時代理大使）
1930/01/16		1930/04/14		吉田伊三郎（特命全権大使）
		1932/01/11		村上義温（臨時代理大使）
		1932/12/31		吉田伊三郎（特命全権大使）※死去
		1933/04/23		村上義温（臨時代理大使）
1933/05/26		1933/09/22	1933/	武者小路公共（特命全権大使）
		1934/12/26		黒田二郎（臨時代理大使）
1934/12/11		1935/03/02	1935/	徳川家正（特命全権大使）
		1936/09/08		宮崎勝太郎（臨時代理大使）
1936/12/15		1937/02/26	1940/	武富敏彦（特命全権大使）
		1940/10/25		木下武雄（臨時代理大使）
1940/09/13		1940/10/25		栗原正（特命全権大使）～1946/01/31

表2 駐イスタンブル大使館における駐在武官（陸軍／海軍）

陸軍	
1920年06月～1921年05月	桑木崇明【陸士16期・陸大26期】派遣時は中佐（最終：中将）
1927年09月～1930年06月	橋本欣五郎【陸士23期・陸大32期】派遣時は少佐（最終：大佐）
1930年01月～1932年	飯村穰【陸士21期・陸大33期】派遣時は中佐（最終：中将）
1932年05月～1934年	神田正種【陸士23期・陸大31期】派遣時は中佐（最終：中将）
1934年03月～？	芳仲和太郎【陸士27期・陸大37期】派遣時は中佐（最終：中将）
1936年07月～1938年	磯村武亮【陸士30期・陸大39期】派遣時は中佐（最終：中将）
1938年12月～1939年	立石方亮【陸士31期・陸大41期】派遣時は中佐（最終：少将）
1941年07月～？	太田梅太郎 補佐官 派遣時は大尉。
海軍	
1923～24年	戸荊隆始【兵37期・海大甲19期】派遣時は少佐（最終：中将）
1924～26年	三浦省三【兵36期・海大甲17期】派遣時は少佐
1926～28年	山村実【兵37期】派遣時は少佐
1928～29年	山田敏世【兵39期】派遣時は少佐
1929～31年	池田人【兵42期】派遣時は少佐 [1931～38年廃止]
1938～40年	石川信【兵42期】派遣時は大佐
1940～45年	松原明夫【兵47期】派遣時は中佐

えたのかどうかを確認することは出来ない。また橋本自身の諸著作においてアタテュルクの行動・思想・人格などのどういった点に影響を受けたのかという記述を確認することは出来ない。それゆえに橋本が例えばアタテュルクの有名な演説集の欧米語訳を読むなどして、アタテュルクの思想の内実に感化を受けたのか、単に陸軍士官が政権を握って国政にあたるという表面的な事象の興味だけに留まっていたのかを弁別することはできない。

一方、海軍では駐在武官と並んで、練習艦隊の行程途上に1926年にイスタンブルを訪問した山本英輔（1876-1962）中將らがアンカラに赴いてアタテュルクとの謁見の栄誉に浴したことが特筆される。アタテュルク存命中に、海軍の練習艦隊は3度、イスタンブルに寄港している。すなわち1926年に山本を司令官とする八雲・出雲、1934年に松下元（1884-1953）中將を司令官とする八雲・出雲、1937年に古賀峯一（1855-1944）中將を司令官とする八雲・磐手である。

松下も山本と同じくアンカラに赴いてアタテュルクへの表敬訪問を希望したが叶わず、古賀も同様にアンカラに赴くことは出来なかった。山本との際とは異なる対極的な処遇は、単なる日程の問題とも言われるが、当時の満洲国問題をめぐって日本と距離を置くためであったとも言われる。また海軍関係では、皇族として海軍に関与された高松宮宣仁（1905-1987）親王・同妃殿下を伴い欧米諸国周遊途上に1931年にトルコを訪問し、妃殿下をイスタンブルに残して、自身はアンカラに赴きアタテュルクと会見している。

この頃、イスタンブルには外交官・軍人とともに貿易関連事業に従事する民間人も在留していた。先に述べたようにローザンヌ条約を契機として日本と新生トルコ共和国と日本との間に国交が樹立されると、日本の財界は新たな貿易の相手国、ならびに地中海世界における日本の貿易の橋頭堡としてトルコに対する関心・期待は極めて大きいものであった。大阪商業会議所

内に日土貿易協会が設立されると、同協会は東京の日土協会と競いながら、商工省が1929年にイスタンブルに設けた日本商品館の経営権を獲得して、関西を中心にトルコとの貿易事業を推進していった⁽⁵⁾。同館はトルコ政財界関係者の訪問を受けているものの、同館が刊行していた月刊の館報にはアタテュルク訪問の記述はなく、また日本・トルコの公文書にも訪問の事実を見出すことはできない。同館の初代館長たる安江安吉以下、日本人スタッフがアタテュルクに謁見した事実は見出されない。

また日土貿易協会の理事長で、同協会の設立・運営に深くかかわった山田寅次郎(1866-1957)が、1931年のトルコ訪問に際してアンカラでの共和国記念日式典において、アタテュルクと面会を果たし、会話したように巷間伝えられている。しかしながら、共和国記念日式典に列席したことは確認できても、アタテュルク本人と面会した、ましてや会話をしたというのは全く事実ではなく、自伝・伝記にありがちな誇張に過ぎない。加えて山田がオスマン朝に雇用されて陸軍士官学校で日本語を教えたという事実はなく、もちろんアタテュルクが日本語を学んだというような突拍子もない伝説は全くの虚構であって決して史実ではない⁽⁶⁾。

一方、同協会関係者のなかにあつて、独自の世界観に基づきアジア各地で起業を試みた大谷光瑞(1876-1948)がトルコにおいても自身の弟子たちを介して工場や農園経営に着手していた。とりわけアンカラの農園はアタテュルク所有の農園の一部を分け与えられたものであるが、その実態は(KÜÇÜKYALÇIN 2010a,b), (長谷部2019), (嵩2019)により、ようやく解明されつつあり、書簡による交渉はあったことは確認できるが、大谷光瑞がアタテュルクと面会したことはない。大谷がアタテュルク所有の農園の一部を利用できたことは、大谷が浄土真宗本願寺派の法主であり、日土貿易協会の関係者であり、そして何より大正天皇との縁戚関係にある伯爵であったことが影響しているものと

判断できる。

学界では日本のトルコ研究の創始者たる大久保幸次(1887-1950)が1936年にトルコに赴いたイスタンブルで開催されたトルコ言語協会(Türk Dil Kurumu)の第3回大会において口頭発表を行った際に、他の発表者共々、大会を視察中のアタテュルクとの謁見を果たした。学者としてアタテュルクと謁見したのは大久保だけであろうが、小幡西吉大使の通訳としてイスタンブルに赴任した内藤智秀(1886-1984)は帰国後に外務省を辞して学者となり、お茶の水女子大学などで教鞭をとり、トルコ関係の多くの文献・論文を著した。内藤はトルコでの在任中に恐らく通訳という職務柄、アタテュルクとの同席する機会があったものと判断される。

また同じく書記官としてトルコ駐在経験を有している小林高四郎(1905-87)も帰国後に内藤のように外務省を辞して慶應義塾大学に奉職するなど学界に活躍の場所を移したが、在任期間からアタテュルクと同席する機会があったかどうかは定かではない。

他方、アタテュルクの対日政策上において最も重要な役割を担ったのは、1936年に日本大使として東京に送り込まれた、祖国解放戦争時代からのアタテュルクの友人・同志の一人であったヒュスレヴ・ゲレデ(Hüsrev GEREDİ, 1884-1962)である。ゲレデ大使は、同じく日本がトルコ大使として満を持して送り込んだ小幡西吉と対をなすに相応しい、極めて有力な人物であった。この時期に世界恐慌の影響により、世界的なブロック経済へと移行する中にあって、アタテュルクが自国経済・産業保護のために打ち出したバーター貿易制度を打ち出した。これにより日本とトルコ間の貿易は大いに冷え込み、日本がイスタンブルに構えた日本商品館は閉鎖・撤退に追い込まれた。こうした状況下に赴任したゲレデ大使は、前任者たちと異なり極めて積極的に行動して、貿易関係の後退のなかにあつて日本＝トルコ関係の悪化を防ぎ、現状維持に尽くした大使であった。そうした活動

のなかでゲレデ大使は、従前まで日本側主体に執り行われていた和歌山県大島におけるエルトゥールル号事件犠牲者祭礼につき、慰霊碑(吊魂碑)をトルコ共和国出費で大規模改築して、トルコ共和国の参画・発言権を強化しつつ、日本の軍部や民間活動家たちが抱いていた大アジア主義的期待感を膨らまして自国有利に導くべくエルトゥールル号事件の記憶を喚起させて両国間の親善を守ったのだった。また初代のフルシー・ファド(Hulusi Fuad Tugay)以来、駐日トルコ大使は大阪の日土貿易協会との関係が深かったが、ゲレデ大使は、日土貿易協会のみならず東京の日土協会との関係も重要視し、同協会の名誉総裁であり、前述のようにアタテュルクと会見経験を有する高松宮宣仁親王殿下に対して礼を尽くした。

また、この同時代期にトルコ共和国政府が日本に注目した興味深い事例が存在する。

明治維新前、北海道小樽市手宮において発見された手宮洞窟という海蝕洞窟の壁面に残された彫刻につき、発見以来、国内外の学者が様々な解釈を発表してきたが、1913年に人類学者の鳥居龍蔵(1870-1953)が、突厥文字であるとの説を発表し、これを受けて、1918年に言語学者の中目覚(1874-1959)が古代トルコ文字を応用して綴られた鞆鞆語を縦書きにしたものであると主張した。両者の説は諸説のなかにあって必ずしも有力視されたわけではないが、(LEGENDRE c1932)など欧米諸国の研究書に取り上げられ、トルコにおいても知られており、1932年に駐イスタンブル日本大使館の村上義温代理大使がトルコ外務省より受けた照会に関して本国外務省に以下のように打電している。

「…過般小官「アンカラ」滞在中、日本関係課長ヨリ小官ニ対シ大統領「ケマル、バシャ」ニ於テ右碑銘ニ関スル記事ニ付、多大ノ興味ヲ有シ、自ラ外務大臣ニ対シ本件照会方ヲ命令シタル旨ヲ語りタルアリ、且同大統領ハ自ラ土耳其古語ノ純化運動ヲ提唱

シ居ル次第ナルヲ以テ其ノ点御含ミノ上成ル可ク速カニ右ニ関スル学問的調査資料入手ノ上斡旋…」⁽⁷⁾

このように、村上代理大使はアタテュルク自身がトルコ語純化のためと想定しているが、既に(永田2004)や(小笠原2011)において解明されているように、建国創始期においてアタテュルクは、国家の基盤たるナショナリズム教育の構築に、この事例を援用したかったのではないかと理解される。ただ日本側の回答に関する文書は見出されず、本件は立ち消えになったものと推測されるが、アタテュルク自身が積極的に動いたという点が興味深い。

事後、これらの彫刻が文字か絵画かという議論は、決着がつかなかったが、近郊の余市町で発見されたブゴッベ洞窟の調査に参画したトルコ史を専門とする東洋史学者の護雅夫(1926-91)は両遺跡の壁画につき、文字説を完全に否定して絵画であると結論付けた(護1953)。

B. 第二次世界大戦期

1939年9月1日、ドイツ軍によるポーランド侵攻にともない、第二次世界大戦が勃発した。日本がアメリカに宣戦布告をしながら参戦するにはさらに2年の時を経てからであるが、日本の指導者層はヨーロッパを舞台とした世界大戦の動向を注視するなかで、アタテュルク死後のトルコ動向にも注目していた。

この時期に日本において最もアタテュルクについて言及し、その名を日本社会に喧伝せしめたのは大川周明(1886-1957)である。数多くの大川の著作のなかで、『亜細亜建設者』に所収されるアタテュルクについての叙述は、付表にあるように最初雑誌『公論』に連載執筆したものを一部改稿の上、単行本として上梓したものである。戦前・戦中期の日本においてイスラーム世界の動向に注視していた大川は本書の中にアラブのイブン・サウド、イランのレザー・パフレヴィー、インドのガンジー、ネルーと並べ

てアタテュルクを取り上げている。

もちろん大川自身はアタテュルクの聲咳に接したわけでもなく、トルコ語文献に依って執筆したわけではない。しかし大川は本書においてアタテュルクに関して多くの紙片 (85～216頁) を割いており、版・刷を重ねて広く読者層を獲得したことから、戦前・戦中期のみならず戦後にまで影響を及ぼして日本社会におけるアタテュルク認識の原像を形成したものと評価することが可能である。

大川のアタテュルクに関する基本認識は、上述書に取り上げられたイブン・サウド、レザー・パフレヴィー、ガンジー、ネルーと並んで、アジアにあって欧米列強の影響・支配に徹底的に対抗した人物の一人という位置づけに留まり、一方的な親近感をもって肯定的に評価するものである。もちろん大川はアタテュルクおよびその後継者たるトルコ共和国指導部が満洲事変以降に日本のアジア主義的活動に警戒していたことなど一顧だにしていなかった。

C. 戦後

トルコ共和国は第一次世界大戦の敗戦を教訓にして、第二次世界大戦において両陣営からの接近にもかかわらず長らく中立を堅持し、戦局の大勢が決して後、戦後の国際関係の立場を確保すべく、日本に宣戦布告した。もちろん両国間で戦火を交えることなく、トルコ共和国は戦勝国となった。宣戦布告に先んじて、アンカラの日本大使館は監視下に置かれた。この際に軟禁状態に置かれた大使館員のなかで、唯一、前述の小林高四郎が戦後にその体験を書籍として刊行したが、同書の中にはアタテュルクに関する言及は見られない。

戦後直後の創作ミステリー小説として、登場人物にアタテュルクを登場させた橘外男『君府』(東和社, 1949年) がある。いわば前代の残滓が戦後直後の娯楽作品として開花したもののだが、この頃には戦中期のアタテュルクの評価は忘れ去られ、ただその高名だけが継続・記憶されて

いたことがみてとれる。

1957年のサンフランシスコ講和会議と同会議で調印された平和条約により、日本はアメリカの占領を脱して主権を回復したが、同時にトルコ共和国との外交関係が再開することとなった。

占領期において戦前・戦中期にアタテュルクを称揚した大川周明、橋本欣五郎は戦犯として巣鴨プリズンに投獄され、さらにアジア主義にかかわる数多くの人間が戦を失った。その一人としてアタテュルクの聲咳に接した大久保幸次も不遇のままの戦後まもなく没した。こうして日本における「回教政策」は放棄され、忘却されるに至った。

この時期、第三世界すなわちアジア、アフリカ、ラテン・アメリカ諸国において、植民地状態からの脱却をはかる大きな運動が巻き起こり、アジア主義を放棄した日本社会にもその影響が及び、多くの日本人も戦前・戦中期とは異なる立場でこの運動に参画した。その際に注目された運動の中心人物は、インドネシアのネルー、エジプトのナセル大統領ら同時代の指導者たちであった。すでにアタテュルクは没しており、戦後日本の知識人たちには米ソ冷戦構造という戦後の世界情勢のなかで活躍する指導者たちにばかり注目していた。この時期の日本において、戦前・戦中期に注目を浴びたアタテュルクないしは彼の後継者たるイスマト・イヌニュの存在は忘れられたかのようであった。

1960年代になって、トルコ共和国に興味を抱く日本人が再び現れだした。そのなかで1968年に刊行されたトルコ語に精通する大島直政が著した中公新書の『遠くて近い国』は先駆的な存在であったものの、アタテュルクに関してはわずかな記述に留まる。それでも後年になって大島はアタテュルクに関する著書を出版することとなる。

1964年の東京オリンピック、1970年の大阪万博は日本社会が世界との関係意識を高揚させる契機となったが、大阪万博においてトルコ共和国は単独参加ではなく、イランとパキスタンの

中東3か国の経済協力を基盤とする組織によるRCD (Regional Cooperation for Development) 館としての共同参画に留まった。このためか同時期の文献においても特筆すべきものが見当たらない。

1975年に久しぶりにアタテュルクに関する単行本が欧文からの翻訳ではあるが出版された。フランス人ジャーナリストであるジャック・ブノア＝メシャン (Jacques Michel Gabriel Paul Benoist-Méchin, 1901-83) が20世紀前半の第三世界の指導者たちの評伝を試みるなかでアタテュルクを題材にして1954年に上梓した『灰色の狼ムスタファ・ケマル』が、同じくジャーナリストである牟田口義郎によって翻訳されたのである。もちろん本書は大川周明とは異なった視点で描かれたものである。

1980年代からトルコ語ないしはオスマン語というアラビア文字表記の古典トルコ語を習得し、トルコに精通している日本人研究者たちの数は飛躍的に増えたが、その主たる関心はオスマン朝であったものの、数名がアタテュルク、およびトルコ共和国を研究対象とするようになった。付表のように最近では単行本の研究書まで出版されるようになった。

21世紀にはいり、新潟県柏崎市のトルコ文化村にトルコ政府から寄贈されたアタテュルク像が2005年の同園閉園にともない放置されたことが両国間で問題となったが、2009年に和歌山県大島のエルトゥールル号慰霊碑側に移築されることで解決を見た。

最近では研究論文・研究書と並んで、三浦伸昭『アタテュルクあるいは灰色の狼』のような文芸作品も現れ、アタテュルクを再考・再評価しようとする動きもみられる。

おわりに

ここ数年間、百周年記念を契機に第一次世界大戦にかんする研究および学術文献が多数現れた。従前までの日本における第一次世界大戦に関する学術研究の停滞を一新するような動きで

あった。それを考えれば、やがて祖国解放戦争およびトルコ共和国建国百周年、それは同時に日本＝トルコ国交樹立百周年を迎えることとなり、アタテュルクおよびその指導によるトルコ共和国建国の諸政策に関して学術的関心が高まり成果があがることが期待される。

<注>

- (1) 元来、「アタテュルク」は1934年に制定された氏姓法によって、トルコ共和国で唯一人に認められた姓として共和国から贈られたものであり、それ以前はイスラーム教徒の氏姓慣習に倣ってムスタファ・ケマルと呼称すべきであるが、本稿では便宜上、アタテュルクと統一して呼称・表記する。ときにケマルが姓と誤解される場合があるが、トルコ語で「完璧な」を意味するケマルは少年時代から成績全般に優秀なゆえに、付与されたイスラーム教徒の氏姓慣習のラカブ (laqab / lakap) という通称・あだ名であって姓ではない。日本を含む世界で著名なアタテュルクであるが、戦後から現在に至るまで日本におけるトルコ研究は圧倒的にオスマン朝 (1299-1922) を対象とする研究に集中しており、トルコ共和国の創始者たるアタテュルクを研究している日本人研究者は非常に少ない。それでも日本大学の粕谷元氏はトルコ留学以来、学術書・通俗書を問わずアタテュルク関係のトルコ語文献を網羅的に渉猟されており、アタテュルク関係文献の権威である。
- (2) 本稿においては、公刊文献資料を対象として、公刊されない・限定公刊の文献は例外的にいくつか採用するに留まる。アジア歴史資料センターの設立にもとない、各文書館に収蔵されているそうした文献も一部閲覧可能となっており、加えて従前まで文献自体の探索も進んでおり、今後のさらなる精査によって補完充実をはかることが必要である。
- (3) 杉森久英の大谷光瑞にかんする評伝には、根拠の検証のないままに、大谷が祖国解放戦争に武器を供与し、それによりアタテュルク側が勝

利を収めたのだという荒唐無稽な話が記されるが、本稿で記述したように大谷光瑞とその弟子たちはトルコ共和国における農園経営などの事業に大きな関心を抱いて、イスタンブール、ブルサ、アンカラにおいて事業に従事したことは紛れもない事実であるが、杉森が伝えるような話を裏付ける史料は日本・トルコおよび世界において見出されておらず、大谷の弟子たちによる創作逸話とみなすのがまず妥当である。

- (4) 小幡大使ならびに日本がイスタンブールを拠点に推進した日本＝トルコ通商関係の推進事業の詳細については、(MISAWA 2010)を参照。
- (5) 日土貿易協会のイスタンブールにおける貿易振興事業の詳細については、三沢2014を参照のこと。
- (6) オスマン帝国はエルトゥールル号事件の生存者送還に際して、訪土した時事新報記者の野田正太郎を雇用して、アタテュルクがまだ同校に入学する以前の1891-2年、イスタンブールの陸軍士官学校において少数の陸軍・海軍士官をに日本語を教授させた。しかし野田の帰国後にこの試みは放棄され、その後に山田を雇用したという事実は全くない。山田は1891年の短期イスタンブール訪問において野田の世話になり、野田の教鞭を手伝ったことはあるがその際も正式雇用ではなく、陸軍士官学校の野田の宿坊に居候させてもらった際の一時的な私的な手助けに留まるものである。詳細は(MISAWA & AKÇADAĞ 2013), (MISAWA 2017)を参照。
- (7) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B04012312600 (第2画像目から), 各国記念建設物関係雑件／在本邦ノ部 13. 在小幡土耳其古碑関係 (外務省外交史料館)。

<参考文献>

- *付表に掲載。以下は間接的にかかわるもの
- *白杵陽2010『大川周明：イスラームと天皇のはざま』青土社。
- *小笠原弘幸2011「トルコ共和国公定歴史学における「過去」の再構成：高校用教科書『歴史』(1931年刊)の位置づけ」『東洋文化』91, pp.289-309。

*杉森久英1975『大谷光瑞』中央公論社。

*永田雄三2004「トルコにおける「公定歴史学」の成立：「トルコ史テーゼ」分析の一視角(植民地における歴史認識)」『植民地主義と歴史学』刀水書房, pp.107-233。

*中目覚1919『小樽の古代文字』地理歴史学会。

*三沢伸生2014『イスタンブール日本商品館関係資料集—戦間期のトルコにおける日本の経済活動(1)—』三沢伸生

*護雅夫1953「フゴツペ洞窟文化と旧大陸文化」『余市』(地方史研究所：編)余市町 [ほか], pp.45-47。

*MISAWA, Nobuo 2010. *Türk - Japon Ticaret İlişkileri*, İstanbul Ticaret Odası。

*MISAWA, Nobuo 2017. *Verification for the Achievements of a Japanese Merchant in Istanbul : personal history of Torajiro Yamada*, Tokyo : Sophia University。

*MISAWA, Nobuo & Gökür AKÇADAĞ 2013. "The beginning of the Japanese language education in the Ottoman Empire", *Osmanlı Araştırmaları*, 41, pp.253-278。

*LEGENDRE, Aimé François c1932. *La crise mondiale: l'Asie contre l'Europe*, Paris : Librairie Plon。

※本稿は、日本学術振興会科学研究費・基盤研究(B)「大日本回教協会旧蔵写真資料の国際共同研究：画像資料の実態解明とアーカイブ構築」(平成31～令和3年度・研究代表者：三沢伸生)に基づく研究成果の一部である。

(研究員／社会学部社会文化システム学科教授)

著者表記	分類	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
無署名	一般	「『ガリポリー』半島連合軍戦闘詳報」	『偕行社記事』		臨時48	1915	
某將軍	一般	「失敗せるガリポリ戦」	『欧州戦争実記』		55	1916	41-47
木村重治	一般	「ケマルパシヤの戦捷と汎イスラム主義」	『外交時報』	36	9	1922	1240-7
杉山玄二	一般	「近東問題の経緯と風雲児ケマル」	『雄弁』	13	2	1922	32-33
世界思潮研究会 調査部(編)	一般	『近東問題経緯：付・ケマル・パシヤ伝』(世界パンフレット通信：号外)	世界思潮研究会			1922	65p.
長瀬鳳輔	一般	「ムスタファ ケマールパシヤとアンゴラ政府の現状」	『外交時報』	36	7	1922	941-8
米田實	一般	「土耳其問題の紛糾」	『外交時報』	36	8	1922	1017-31
渡邊巳之次郎	一般	「希臘の對土失敗と日本の對露失敗」	『外交時報』	36	9	1922	1302-6
無署名	一般	「ケマルパシヤの土耳其」	『東方時報』	7	10	1922	49-51
無署名	一般	「土耳其王朝廢止：君府のクーデター」	『外交時報』	36	11	1922	1600-3
大久保幸次	一般	「ケマル・パシヤと新トルコの目標」	『自由評論』	12	3	1923	34-38
大久保幸次	一般	「土耳其政体變遷史考」(1) - (14)	『外交時報』	38-10, 39--01, 04, 05, 06, 07, 08, 09, 12, 40-01, 03, 12, 41-02, 04		1923- 25	59-66, 184-195, 77-78, 99-109, 127-135, 102- 111, 114-9, 112-6, 104-20, 123-33, 115-26, 108-119, 94- 108, 106-119
児玉花外	新刊紹介	「熱の花ケマル・パシヤ」	『太陽』	29	1	1923	121
澤田謙		「外交夜話：ケマルパシヤと希臘の神」	『国際知識』	3	2	1923	105-9
長瀬鳳輔	一般	『土耳其の新形勢に對する史的觀察』	日本教育者協會：刊			1923	28p.

著者表記	分類	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
保坂定三郎 (記)	一般	『世界現下の油田争奪戦：リテラリー・ダイゼスト誌調査』(世界パシフィック通信；3)	世界思潮研究会：刊			1923	49p.
八木 (一等主計)	一般	「「ガリポリー」半島上陸作成ノ実験ニ鑑ミ敵前強行上陸ニ於ル陸海軍協働作戦ノ方法ノ研究」	『偕行社記事』		585	1923	35-46
D・M生	一般	「新興土耳古を脊負ふケマル・パシヤの意氣」	『東洋』	26	3	1923	108-111
無署名	一般	「ケマル・パシヤ」	『自由評論』	12	3	1923	79-82
無署名	一般	「ガンディーとケマル・パシヤ」	『東洋』	26	3	1923	105
無署名	一般	「土耳其共和国宣布」	『外交時報』	38	8	1923	133-4
内田定槌	一般	「土耳古の情報」	『文明大観』		2	1924	33-47
河瀬蘇北	一般	『近代反動思想史』	表現社：刊			1924	303p.
神川彦松	一般	「ローザンヌ講和會議と新土耳古の建設」	『外交時報』	39	1	1924	134-47
瀧田欣哉	一般	「奇略縦横ケマルパシヤ」	『雄弁』	15	1	1924	332-3
望月紫峰	一般	「風雲兒ケマル・パシヤ (偉人講談)」 (1) - (9)	『雄弁』	15-04, 05, 06, 07, 08, 09, 10, 11, 12			54-72, 90-110, 146-65, 22-42, 28-49, 46-63, 110-28, 300-18, 274-92.
無署名	一般	「土耳其回教主廢止」	『外交時報』	39	7	1924	121-2
内田定槌	一般	「新・土耳古国の建設」	『啓明会講演集』		16	1925	
立作太郎	一般	「東方問題の渦中に立てる二大政治家」	『外交時報』	41	1	1925	53-72
長岡春一	一般	「成功せる新土耳其」	『外交時報』	41	12	1925	15-26
蜷川新	一般	「ケマル・パシヤと土耳古の復活」	蜷川新『大道に立ちて』(報公会：刊)			1925	92-101

著者表記	分類	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
堀敏一	一般	「ケマル・パシヤの離婚問題」	『日本及日本人』		85	1925	52-7
満川龜太郎	一般	「ケマル・パシヤの手際」	『月刊日本』		9	1925	7-8
米田實	一般	「近東の一大問題」	『外交時報』	41	7	1925	54-64
HULUSI, Fuad	一般	「土里古の經濟事情」	『啓明会講演集』		16	1925	
無署名	一般	「希臘土里其の葛藤：君府大司教追放事件」	『外交時報』	41	5	1925	151-2
有川治助	一般	「トルコ革命憲法と其意義」	『外交時報』	44	5	1926	13-34
内田定槌	一般	「本協会設立趣旨」	『日土協定会報』		1	1926	1-3
笠間杲雄	一般	「トルコの近情」	『波斯より土里古まで』(文明協会：刊)			1926	99-152
笠間杲雄	一般	「トルコの政教分離と回教連盟：400年来の伝統を捨てたる」	『国際知識』	6	9	1926	20-24
笠間杲雄	一般	「バルカン事情特に土里古に就て」	『龍門雜誌』		455	1926	18-44
笠間杲雄	一般	「革命後のトルコ」	『太陽』	32	5	1926	107-115
笠間杲雄	一般	「土里其及バルカン地方の現状」	『講演会速記録』(日露協会)	15		1926	1-35
笠間杲雄	一般	「日土関係の過去現在及将来」	『外交時報』	44	522	1926	143-152
内田定槌	一般	「本協会設立趣旨」	『日土協定会報』		1	1926	1-3
笠間杲雄	一般	『日土關係ノ現在及將來ニ就テ：大正十五年四月二十三日於衆議院議長官舎』	衆議院：刊			1926	26p.
田鍋安之助	一般	「土里古とケマル・パシヤ」	田鍋安之助『西南軍細重視察談』(黒龍会出版部：刊)			1926	8-13
ジャパン・タイムズ社邦文パンフレット通信部(編)	一般	「『鐵の人』ケマル」	『邦文パンフレット通信』		46	1926	1-22

著者表記	分類	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
小幡西吉	一般	「君府自由港設置問題」	『日土協会会報』		2	1927	49-53
佐々木到一		「ケマルカツキイカ」	佐々木到一『南方革命勢力の実相と其の批判』(極東新信社:刊)			1927	74-6
中西伊之助	一般	「ケマル・パシヤ, ガーヴェエ及び將介石」	『大調和』		8	1927	94-5
早坂二郎	一般	「土耳其中興の雄ケマル・パシヤ」	早坂二郎『歴史を創る人々』(中西書房:刊)			1927	1-26
堀内文次郎	一般	「ケマルパシヤの教訓」	堀内文次郎『光は東から』(忠誠堂:刊)			1927	32-6
山本英輔	一般	「地中海及亜弗利加沿岸廻航談」	『貿易』	27	5	1927	8-19
山本英輔	一般	「ケマル・パシヤ會見記」	『改造』	8	4	1927	117-121
山本英輔	一般	「新月国の支配者ケマル大統領と語る」	山本英輔『世界英傑巡礼』(寶文館:刊)			1927	15-72
芦田均	一般	「熱血児ケマル・パシヤ」	『キング』	4	4	1928	4-11
小幡西吉	一般	「スミルナ経済事情」	『日土協会会報』		3	1928	42-48
小幡西吉	一般	「ボスフォール海峡黒海出口の航路標識設備改善」	『日土協会会報』		5	1928	36-37
小幡西吉	一般	「一九二六年に於ける土耳其外国貿易と日土通商関係の発展」	『日土協会会報』		6	1928	13-21
小幡西吉	一般	「黒海沿岸に於ける土耳其諸港」	『日土協会会報』		7	1928	47-53
小幡西吉	一般	「小包郵便に依る土耳其輸入状況」	『日土協会会報』		6	1928	32-33
小幡西吉	一般	「新興土耳其と帝國近東進出」	『日本及日本人』		188	1928	100-104
小幡西吉	一般	「土耳其に於ける「石炭」産出状況」	『日土協会会報』		4	1928	48-49
小幡西吉	一般	「土耳其に於ける小麦粉の受容並輸入状況」	『日土協会会報』		6	1928	34

著者表記	分類	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
小幡西吉	一般	「土耳其に於ける粗布取引状況」	『日土協会会報』		6	1928	27-29
小幡西吉	一般	「土耳其に於ける絨毯製産状況」	『日土協会会報』		4	1928	49-51
小幡西吉	一般	「土耳其煙草の特質」	『日土協会会報』		7	1928	57-60
小幡西吉	一般	「土耳其工業振興の議」	『日土協会会報』		4	1928	43-45
小幡西吉	一般	「土耳其中央銀行設立とオットマン銀行の地位」	『日土協会会報』		5	1928	41-42
小幡西吉	一般	「勃牙利に於ける外資活躍状況」	『日土協会会報』		6	1928	21-26
小幡西吉	一般	「佛國人の土耳其油田調査」	『日土協会会報』		4	1928	52-53
日土協會(編)	一般	『土耳其事情』	日土協會：刊			1928	248p.
山本英輔	一般	「新興土耳其の希望ケマル・パシヤ」	『実業』	12	5	1928	4-11
山本英輔	一般	「新興土耳其の快男兒ケマル・パシヤとの會見記」	『海外』		16	1928	74-82
伊藤金次郎	一般	「ケマル・パシヤ」	伊藤金次郎『新聞気焔』(刀江書院：刊)			1929	222-31
小幡西吉	一般	「最近の土耳其：東洋現勢研究会講演要旨」	『東洋』	32	7	1929	1-11
内田定槌	一般	「土耳其の改造に就て」	『外交時報』	52	4	1929	100-11
小幡西吉	一般	「土耳其より歸りて」	『外交時報』	50	6	1929	1-10
土耳其大使	一般	「土耳其の現状」	『外交時報』	51	3	1929	185-7
田尻昌次	一般	『千九百十五年ガリポリに於ける上陸作戦』	織田書店：刊			1929	
内藤智秀	一般	『トルコのローマ字採用』	ローマ字ひろめ會：刊			1929	28p.
内藤智秀	一般	「トルコ國民黨とケマル・パシヤ」	『海外』		29	1929	71-4
山本英輔	一般	「遠航雑感」	『外交時報』	46	9	1929	155-62
芦田均	一般	「亞細亞に氣を吐く怪傑ケマル」	『雄弁』	21	7	1930	8-14

著者表記	分類	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
大川周明	一般	「ケマル・パシヤ」	大川周明『日本的言行』(行地社:刊)			1930	123-6
大崎厚夫	一般	「ケマル・パシヤ」	大崎厚夫『世界を動かす十二傑』(千倉書房:刊)			1930	141-62
小幡酉吉	一般	「ケマル・パシア」	『世界人の横顔』(四条書房:刊)			1930	126-130
BOSE, Rash Behari ; 中谷武世	一般	「革命土耳其の指導原理とムスタファ・ケマル」	R.B.ボース: 中谷武世『革命亜細亜展望』(万里閣書房:刊)			1930	145-68
TWEEDY, Owen	一般	『新興トルコ見たまゝの記』	タイムス出版社国際パンフレット通信部: 刊			1930	33p.
無署名	一般	「土耳其と波斯の葛藤」	『外交時報』	55	5	1930	160-2
内藤智秀	一般	「ケマルとムッソリーニ」	『外交時報』	53	3	1930	136-45
安藤明道	旅行記	「ケマルの臺所」	安藤明道『亞歐一跨』(新光社:刊)			1931	144-150
岡倉一雄	一般	「英傑ケマル・パシア」	『戦友』		250	1931	34-6
沢田謙	一般	「ケマル・パシヤ」	沢田謙『世界十傑伝』(大日本雄弁会講談社:刊)			1931	459-509
内藤智秀	一般	「トルコ新政黨の成立と其の解散」	『外交時報』	57	1	1931	218-28
内藤智秀	一般	「クルヂスターンの獨立問題」	『外交時報』	60	5	1931	139-149
ワーサム, H.E.	一般	「ケマルパシヤと土耳其古帽」	『邦文外国雑誌』	1	1	1931	60-3
小島徳彌	一般	「トルコの復興と英傑ケマル・パシヤの経緯」	小島徳彌『世界の重大変局』(教文社:刊)			1932	673-81

著者表記	分類	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
財政経済時報社 (編)	一般	「ケマル・パシヤ獨裁下の土耳其」	『新国民経済の理論 と実際』(財政経済 時報社：刊)			1932	70-6
二瓶兵二	一般	「土耳其事情」	『日土協会会報』		14	1932	1-12
内藤智秀	一般	「トルコの聯盟参加」	『外交時報』	63	6	1932	165-72
中平亮	一般	「トルコ」	中平亮『亜細亜民族 起つ』(東洋研究会： 刊)			1932	120-61
無署名	一般	「トルコ聯盟加入決定」	『外交時報』	63	3	1932	196
飯村稜	一般	「トルコ及びバルカン諸邦の近況」	『東亜』	6	8	1933	96-110
内藤智秀	一般	「蘇聯邦内のトルコ民族問題」	『外交時報』	68	5	1933	134-142
中平亮	一般	「新興土耳其」	中平亮『新装亜細亜 と阿弗利加』(平凡 社：刊)			1933	11-74
村上義温	一般	「土耳其人観光客誘致方法」	『ツーリスト』	21	3	1933	
ホルツマイスター, クレメンス	一般	「ケマル・パシヤの官邸【土】外観・ 内部」	『国際建築』	9	5	1933	128-30
無署名	一般	「日土通商協定失効期延長」	『外交時報』	67	4	1933	224
内田定槌	一般	「日土通商航海新条約の実施」	『日土協会会報』		16	1934	25-38
内田定槌	一般	「日土通商航海新条約の実施」	『外交時報』	70	5	1934	165-182
神田正種	一般	『ソウェート聯邦の極東政策現況』	東亜経済調査局			1934	19p.
神田正種	一般	「土耳其及び近東の近情」	『大亜細亜主義』	2	16	1934	23-24
草刈九十九	一般	「レザ汗とケマル・パシヤは何を語 ったか」	『国際評論』	3	9	1934	98-108
小林知治	一般	「獨眼英雄ケマル・パシヤ」	小林知治『誰が世界 を動かすか?』(漫画 時代社：刊)			1934	51-5

著者表記	分類	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
小林知治	一般	「獨眼英雄ケマル・パシヤ」	小林知治『世界独裁英傑譚』(南光社:刊)			1934	147-172
社会教育会 (編)	一般	「ケマル・パシヤ (土耳古)」	社会教育会 (編)『現代世界十傑』(社会教育会館:刊)			1934	116-33
内藤智秀	一般	「トルコ産業五ヶ年計畫」	『外交時報』	71	1	1934	160-8
瓜生健児	一般	「戀・劍・辯の熱血兒 (ケマル・パシヤ)」	大日本雄辯會講談社 (編)『東西大雄辯家物語』(大日本雄辯會講談社:刊)			1935	135-45
笠間杲雄	一般	『沙漠の国』	岩波書店			1935	
神田正種	一般	「中東事情」	『東洋』	38	8	1935	29-43
下村宏	一般	「ケマルパシヤと弘法大師」	『国語教育』	20	5	1935	94-103
下村宏	一般	「ケマルパシヤと國字運動——(東京市京橋區公會堂に於ける講演會にて)」	『講演』		109	1935	1-17
無署名	一般	「トルコ ケマル」	東京日日新聞社, 大阪毎日新聞社 (編)『噴火山上の歐洲世界大戰再び起るか』(東京日日新聞社, 大阪毎日新聞社:刊)			1935	201-7
徳川家正	一般	「最近の土耳其國々情」	『日土協會会報』		20	1936	1-8
内藤智秀	一般	「ダ・ボ兩海峡とアジアの回復」	『外交時報』	78	4	1936	126-37
商工省貿易局 (編)	一般	『土耳古經濟事情並ニ日本トノ貿易事情』	商工省貿易局:刊			1936	100p.
ARMSTRONG, H.C.; 三上正毅 (記)	一般	「ムスタファ・ケマル」	『日本読書協會会報』		183	1936	177-233

著者表記	分類	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
内田定槌	一般	「エルトグルール号殉難者の弔魂碑 除幕式と慰霊祭に参列して」	『日土協会会報』		21	1937	92-96
若林半	一般	「ケマル・パシヤと土中古の變革」	若林半『回教世界と 日本』(若林半：刊) ※私家版			1937	43-7
GUNTHER, John	一般	「ケマル・アタツルク」	『日本読書協会会報』		198	1937	93-5
神田正種	一般	「ケマル大統領の印象：イスメット 新大統領の素描」	『大亜細亜主義』	6	12	1938	37-40
円地与四松	一般	「ケマル・アタチュルク」	円地与四松『世界の 変貌』(人文書院：刊)			1938	167-8
BERTLETT, Vanon ; 栗原古城 (訳)	一般	「ケマル・アタツルク」	『日本読書協会会報』		213	1938	186-92
GEREDE, R.Husrev	一般	「逝けるケマル大統領」	『大亜細亜主義』	6	12	1938	33-36
無署名	一般	「トルコ大統領逝去」	『外交時報』	88	5	1938	176
大川周明	一般	「新土耳古建国者ケマル・アタチュ ルク」(1) - (3)	『公論』			1939- 40	209-251 ; 186-204 ; 170-184
花岡止郎	一般	「アタテュルク前大統領に対する印 象とイスメット新大統領に対する感 想」	『日土協会会報』		23	1939	34
内田定槌	一般	「故土耳其大統領ケマル・アタチュ ルクを追悼す」	『日土協会会報』		22	1939	27-28
大川周明	一般	「新トルコ建設者ケマル・パシヤ」 (1) - (3)	『公論』	1939-12, 1940-01, 02		1939- 40	209-50, 186- 204, 170-184
笠間杲雄	一般	『回教徒』	岩波書店			1939	
二瓶兵二	一般	「東洋的なアタテュルク・人情味豊 かなイノス」	『日土協会会報』		22	1939	35

著者表記	分類	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
徳川家正	一般	「会長就任に際して」	『日土協会会報』		22	1939	1-3
村上義温	一般	「トルコの現勢」	『新亜細亜』		87	1939	50-60
FODER, M.W. ; 鈴木東民 (訳)	一般	「ムスターファ・ケマルから・アタチュルク (土耳古の父) へ」	FODER, M.W. ; 鈴木東民 (訳) 『欧洲におけるヒトラアの策謀』 (万里閣 : 刊)			1939	124-46
KORN, Hans ; 立花士郎 (訳)	一般	「闘士ムスタファ・ケマル」	KORN, Hans ; 立花士郎 (訳) 『恐るべきアジア民族』 (大東出版社 : 刊)			1939	80-1
無署名	一般	「カマル・アタチュルク」	『話』	7	1	1939	359
MENENCIOĞLU, N. ; 武富敏彦 (訳)	一般	『日本国「トルコ」国間貿易協定立 日本国「トルコ」国間貿易協定ノ實 施ニ關スル取極 : 附土耳古向輸出 手續要綱 : 土耳古産品輸入證明手 續要綱』	日本歐阿近東輸出入 組合聯合會 : 刊			1939	52p.
武富敏彦	一般	「「トルコの父」アタツルク」	『中央公論』	55	12	1940	214-8
河内清	研究	『トルコ共和国の社會事情概況 : 中 間報告』	東亞研究所 : 刊			1940	73p.
ROHN BACH, Paul ; 栗田書店 (編)	一般	『バルカン・トルコ』	栗田書店 : 刊			1940	147p.
青木重孝	一般	「故トルコ大統領アタテュルクの葬 儀」	青木重孝『ドイツ新 聞の読み方』 (大学 書林 : 刊)			1941	17-8
大川周明	一般	『亜細亜建設者』	第一書房 : 刊			1941	428p.
笠間杲雄	一般	「バルカン今後の動向」	『政界往来』	12	4	1941	142-149
笠間杲雄	一般	「バルカン戦争と近東の宿命 : 世界 戦局の新転機」	『改造』			1941	

著者表記	分類	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
近藤一郎	一般	「ケマル・パシヤの登場」	近藤一郎『石油争奪戦』(朝日新聞社:刊)			1941	110-2
花岡止郎	一般	「近東中亞の列強角逐」	『大日』		214	1941	21-32
笠間杲雄	一般	『青刷飛脚』	六興商会出版部:刊			1941	
武富敏彦	一般	『トルコをめぐる国際情勢』	全國大學教授聯盟通報局:刊			1941	42p.
FOOT,M; 福万正守 (訳)	一般	「ケマル大王」	FOOT,M; 福万正守 (訳)『大戦から大戦へ』(東進社:刊)			1941	108-28
大屋久寿雄	一般	『トルコ・政治風土記』	興亜書房:刊			1942	
東亜研究所 (編)	研究	『最近のトルコ事情』	東亜研究所:刊			1942	13p.
MASEFIELD, John; 中野好夫 (訳)	一般	『ガリポリ敗退記』		古今書院		1942	
内藤智秀	研究	『西アジア民族史』	今日の問題社:刊			1943	
内藤智秀	研究	「トルコ民族」	三島安精; 岡島誠太郎; 内藤智秀『西亜細亜』(六盟館:刊)			1943	74-150
前田義徳	一般	『トルコ』	朝日新聞社:刊			1943	
前田義徳	一般	『トルコ國を繞る國際外交巴状戰』	日本外交協會:刊			1943	45p.
PARKER, John; SMITH, Charles; 安井太郎 (訳)	研究	『現代のトルコ』	文明社:刊			1944	
調査研究動員本部	研究	『新シキトルコ』上・下	調査研究動員本部:刊			1945	上下2巻
松尾邦之助	一般	『とるこ物語』	竹内書房:刊			1947	307p.
小林高四郎	一般	『イスタンブールの夜: 外交餘憤録』	一洋社:刊			1948	211p.

著者表記	分類	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
河合哲雄	一般	『ケマル・パシヤのトルコ独立運動史』	大学書房：刊			1949	560p.
ベジク、クラフ	一般	「ケマル・パシヤの憶ひ出」	『カトリックダイジェスト』	2	6	1949	50-6
武者小路公共	一般	「ケマルの恋と涙」	『心』	3	8	1951	61-70
武者小路公共	一般	「ケマルの恋と涙」	武者小路公共『道草十万里』（日本評論社：刊）			1951	287-312
無署名	研究	「ケマル・アタテュルク」	『人物世界史』第1巻（毎日新聞社：刊）			1951	299-312
鈴木正四	研究	『祖国の解放：トルコの場合』（岩波新書：青87）	岩波書店：刊			1954	
加賀山敬一	研究	「ふるいたつトルコ＝ケマル＝パシヤの話」	加賀山敬一『逸話でよむおはなし世界歴史4年下』（実業之日本社：刊）			1954	156-163
三橋富治男	研究	「トルコのケマル：キスケットに抗して」	上原専祿等（編）『世界歴史物語』河出書房			1956	130-50
無署名	一般	「ケマルの銅像」	児童文学者協会（編）『少年少女世界史物語』06（朝日新聞社：刊）			1956	72-3
辻政信	一般	「ケマル・パシヤは生きている」	辻政信『世界の火薬庫をのぞく』（東都書房：刊）			1957	249-55
沢田謙；山中冬児	一般	「伝記 民族のともしび 熱血の英雄 ケマル・パシヤ」	『中学二年コース』	1	5	1957	90-9

著者表記	分類	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
来栖良夫	一般	「日はまたのぼる：トルコ共和国の父ケマル・パシヤ」	菅忠道等（編）『国を愛した人びと』（宝文館：刊）			1958	145-56
中村新太郎	一般	「新しいトルコのたんじょう：建国の父ケマル・パシヤ」	『少年少女のための100の有名な話』04（外国編：02）（実業之日本社：刊）			1960	257-279
BENOSIT-MECHIN, Jacques；牟田口義郎（訳）	一般	『灰色の狼：ムスタファ・ケマル』	筑摩書房：刊			1965	
大島直政	一般	『遠くで近い国トルコ』（中公新書）	中央公論社：刊			1968	
MOOREHEAD, Alan；小池銑（訳）	一般	「ガリポリ戦記」	『エムデン号最後の航海, ガリポリ戦記, アラビアのロレンス』（筑摩書房：刊）			1968	
無署名	一般	「トルコにローマ字を植えたケマル・アタチュルク」	『ことばの宇宙』	1	7	1969	14-29
内藤智秀	研究	「ナセルとケマル・アタチュルク」	『政界往来』	37	10	1971	129-33
鈴木正四	研究	『アジア民族革命の研究：セポイの反乱・トルコ革命』	青木書店：刊			1974	297p.
TALKER, M（島村力：翻案）	一般	「アタチュルク」	『20世紀の歴史』		41	1974	815-819
大島直政	一般	『ケマル・パシヤ伝』（新潮選書）	新潮社：刊			1984	246p.
護雅夫	書評	「『アタチュルク』ホルヘ＝ブランコ＝ヴィヤルタ著, ウィリアム＝キャンベル英訳」	『東洋学報』	65	1, 2	1984	151-6
MOOREHEAD, Alan；小成正（訳）	一般	『ガリポリ：第1次大戦における最大の勇気と最大の愚行』	フジ出版社：刊			1986	

著者表記	分類	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
鴨沢巖	書評	ジェイコブ=M.ランドー編：アタテュルクとトルコの近代化	『Mediterranean World = 地中海論集』		10	1987	177-91
鈴木康弘	記事	「トルコの心とアタチュルク：ボスフォラスを越えて05」	『地理』	35	1	1990	120-4
永田雄三	研究	「父なるトルコ人、ケマル・パシヤ」	『国際協力』		421	1990	34-5
田中直毅	記事	「『灰色の狼ムスタファ・ケマル』ブノアメシヤン著：20世紀のかたち--12の伝記に読む03」	『世界』		606	1995	260-70
山内昌之	論文	「納得しなかった男--エンヴェル・パシヤ 中東から中央アジアへ-7-抗争の復活--エンヴェル対ムスタファ・ケマル」	『世界』		610	1995	330-42
鳥山孟郎	記事	「紙幣の肖像2 ムスタファ・ケマル」	『歴史地理教育』		548	1996	82
山内昌之	記事	「乃木将軍とアタテュルクそして地域文化研究：歴史のクロスロード05」	『本の旅人』	3	8	1997	64-7
山内昌之	研究	「納得しなかった男：エンヴェル・パシヤ中東から中央アジアへ」	岩波書店：刊			1999	614p.
和田章男	記事	「アタチュルクのパジャマ」	『アナトリアン・ニュース』		102	2001	19-21
鈴木雅明	研究	「アタチュルク、そして軍…：現代トルコ<非民主性>の系譜」	『立命館国際研究』	15	3	2003	387-407
瀬戸利春	記事	「灰色の狼の異名を持つトルコ建国の父 ケマル・パシヤ伝」	『歴史群像』	14	3	2005	170-7
三浦伸昭	文学	『アタチュルク：あるいは灰色の狼』	文芸社+D192（※私家版に相当）			2006	455p.
粕谷元（編）	研究	『トルコにおける議会制の展開：オスマン帝国からトルコ共和国へ』	東洋文庫：刊			2007	365p.

著者表記	分類	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
岩坂将充	研究	「EU加盟プロセスにおけるトルコの政軍関係：軍による民主化改革の受容とアタテュルク主義」	『上智ヨーロッパ研究』		1	2008	81-104
ÖZAKMAN, Turgut ; 鈴木麻矢 (訳)	一般	『トルコ狂乱：オスマン帝国崩壊とアタテュルクの戦争』	三一書房：刊			2008	808p.
高山正之	一般	「トルコの好意を無にした日本を貶める国辱市長：トルコの父・ケマル像が柏崎市に贈られたのに今では野晒し」	「月刊テ-ミス」	18	5	2009	78-9
安達千鶴；渡邊研司	研究	「トルコ・アタチュルク廟の意匠的特徴について」	『東海大学紀要（工学部）』	50	2	2010	87-94
KÜÇÜKYALÇIN, Erdal	研究	『大谷光瑞と土耳古 / Kont Otani Kozui ve Türkiye』	İstanbul : DEİK			2010	
KÜÇÜKYALÇIN, Erdal	研究	「大谷光瑞とトルコ：建国の父ケマルパシヤのパートナーとしての大谷光瑞」	『大谷光瑞とアジア』（柴田幹夫：編）（勉誠出版：刊）			2010	270-314
宇野陽子	研究	「アタチュルクと女性たち：妻と養女と『女性解放』」	『国際研究所所報』		46	2011	17-24
粕谷元	研究	『トルコ共和国とラーイクリキ』	上智大学イスラーム地域研究機構：刊			2011	77p.
BOZARSLAN, Hamit	研究	「カリフ制の問題と1924年のトルコにおける議論」	『一神教学際研究』		7	2011	30-41
新井政美（編著）	研究	『イスラムと近代化：共和国トルコの苦闘』	講談社：刊			2013	
森田盛大	記事	「トルコにおける明治維新：建国の父、ムスタファ・ケマル・アタチュルク」	『秋田県獣医師会雑誌』		112	2015	45-57

著者表記	分類	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
設楽國廣	研究	『ケマル・アタテュルク：トルコ国民の父』	山川出版社：刊			2016	
今井宏平	一般	『トルコ現代史：オスマン帝国崩壊からエルドアンの時代まで』（中公新書）	中央公論新社：刊			2017	320p.
長谷部圭彦	研究	「大谷光瑞のトルコ投資：共和国初期のアンカラとブルサにおける日本資本」	『イスラーム地域研究ジャーナル』		11	2019	98－109
小笠原弘幸 （編著）	研究	『トルコ共和国国民の創成とその変容：アタテュルクとエルドアンのはざまで』	九州大学出版会：刊			2019	296p.
高 満也	研究	「大谷光瑞とケマル・アタチュルクのアンカラ・アヒマスッド農園での共同事業について」	『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』		21	2019	31-41

Bibliographies of the Japanese Turkology Works (2): Works about Mustafa Kemal ATATÜRK

MISAWA Nobuo

Mustafa Kemal ATATÜRK is the most famous Turkish people among the Japanese society. But when the Republic of Turkey was declared on October 29, 1923, the Japanese society was cannot afford to this event. Because of the Great Kanto Earthquake on September 1, 1923, the Japanese people was obliged to the domestic reconstruction. Gradually the Japanese people had the enough time to pay attention this new country and especially splendid leader, Mustafa Kemal ATATÜRK.

It is possible to divine the works of Mustafa Kemal ATATÜRK in three periods; (A) his contemporaries (1923-1938), (B) the World War II (1939-1945), (C) Post-war (1945-).

(A) Especially the works by his contemporaries, who resided and worked in Istanbul, like the Japanese ambassadors, embassy staff, the Japanese Military attaches. (B) It is possible to point out Shumei OKAWA was so influential to make famous ATATÜRK in the Japanese society. (C) In post war period, ATATÜRK and his various policies in the early times were could not attract attention among the Japanese society as before.

Key words: Turk, Turkey, Turkology, Mustafa Kemal ATATÜRK,